五話

むがし、むがし、あるとごろに、とでも幼ぐ男の人、えで
「飯食ね、お嫁さんほしなあ」

なって、いだどごさ、
「こんにちわあ」
と若げ女きて
「俺なだば飯も食ね人だあ」
きて、して
「俺どご嫁もらってくれ」
どて、
「したらえでくれ」
どってもらって

毎日、あんちゃは山さ木切り歩いて、して、かちゃは洗濯したり、飯たいだりしているども何も飯も食べねでいるなあで、不思議だ思んだと思っていだども、ある時、となりの人だがら「おめえのアネなんか、あの飯、大きい釜で飯たでで、えっぺ食え、えっぺ食え

って、ごんごん、ごんごんと大き口さ、髪がしゃりかぶって、そいで、握り飯握って、ゴンゴンと口さ入れで食ってだんけではあ」と聞だどって、そいで、あやというものこいだば困ったもんだと思って、ハリの上さあがって、かくいでいだば、やっぱり、十時頃なったえば、まだ米溶いでオガマさ出て、今度まだ飯たげだば、握り飯にして、
「えっぺ食え、えっぺ食え」

って、やっぱり一生懸命食うなんだけどや、あやというものおぼげで、ハリの上がら降りできて、

「このちきしょう、まずまず」

どて、今度棒たがえで、ぼかげだども、かかったども、鬼だもんだはげで、怖(おか)なぐって逃げで、どんどんと逃げでいたば、もう少しで、ほれ、なんぼ逃げでも鬼の足だもんだはげで、かださえぐなって、したば、田圃の端のどごさ行(え)ったば、菖蒲ど蓬どえっぺい植えでいだどごあって、そごさ「どーん」とそのあやかぐえだどって、降いで、菖蒲ど蓬の間さしたば

「今までこご走ってきたなあどごさえったでろう」

どて、訪(た)ねでどんどんと行(え)ぐけれどって、そいでこいだばえがったもんだと思って命一つ払ったどって、まずこういうもんだぁけェ、怖(おか)ねもんだぁけェ、村さきても話しして、そいで五月の節句なれば、魔除けで菖蒲ど蓬ぎと立てるもんだって。

とっぴんからりんさんしょうのみ。